

張説の欽州流謫詩について

高木重俊

はじめに

権力闘争を常態とする官僚世界では左遷・流謫は不可避的な不幸とも言えるが、中朝における官僚生活から一転して異境の生活を強いられる悲嘆は、想像を絶する。古来、流謫の境遇を余儀なくされた詩人たちは、みずからの不運を嘆き慰め、異域の風物を好悪の思いを織りまぜて詩歌に詠じてきた。彼らが詠じるこの境地は、本来きわめて個人的な事情に立脚するものながら、官僚や知識人の宿命的な不運に連なるものとして、広汎な共感を誘う。唐初は京師を中心とした集団的文芸が全盛を極めた時代であるが、異域における思いをうたう流謫詩は、その集団文芸の没個性的な詩風を変革し、個性的な抒情を誕生させる可能性を持つ。その意味で、流謫詩はとりわけ初唐において掘り下げなければならぬ分野の一つと言えよう。

神龍元年（七〇五）正月、いわゆる神龍の政変によって武則天が退位し、中宗が復辟した直後、張易之・昌宗兄弟らに諂^{へつら}い仕えた罪で、多くの宰臣が左遷・流謫された。著名な宮廷詩人で嶺南に流された者には、王無競（広州）・宋之問（瀧州）・閻朝隱（崖州）・杜審言（峰州）・沈佺期（驩州）らがいる。彼らのうち、宋之問と沈佺期がそれぞれ約二十首、杜審言が二首の嶺南詩を残している。ただし、宋之問は二度にわたって嶺南に流されており、詩の数はそれを合算したものである。宋之問・沈佺期の嶺南流謫詩については、かつて考察を加えたことがある¹⁾。

彼らが嶺南に流される前の長安三年（七〇三）の秋冬の交、三十七歳の鳳閣（中書）舍人（正五品上）張説（六六七―七三〇）は、武則天の旨に逆らったかどで欽州（広西壮族自治区欽州県）に配流された。そして、中宗の復辟によって赦免され京師に召還されるまでの一年余の間に、彼

は往復の道中の作を含めて二十二題二十六首の詩を残している。これらは、唐代嶺南詩の最も早い作品群として文学史に地位を占めるのみならず、以後もしばしば左遷と復活とを反復しながら開元の宗臣・詩文の宿老となり、初唐と盛唐をつなぐ詩人として位置づけられる張説の文学の胚胎となるものとして、重要な意味を持つと考える。本稿はその欽州流謫詩群の内容と意義を考察するものである。

一

張説が欽州に流されたのは、武則天の寵臣張易之・昌宗兄弟と対立したためである。長安三年九月、張兄弟は御史大夫兼知政事・太子右庶子魏元忠を失脚させようとたくらみ、魏元忠が司礼丞（従五品上）高勣と謀議し、武則天の不豫に乗じて太子（のちの中宗）を擁立して天下に号令しようとしていると誣告して、張説に側面からの証言を依頼した。武則天は張兄弟の言に惑い、魏元忠を詔獄に下して尋問し、太子や相王（のちの睿宗）や諸宰相も召し出される大騒動となった。一旦は偽証を引き受けた張説であったが、彼は武則天の面前に立ち、魏元忠にさような謀議はなかったと証言した。投獄されて苛酷な取り調べを受けても、張説の毅然とした証言は変わらなかった。武則天は魏

元忠の冤罪を覚ったものの、張兄弟をかばい、魏元忠を端州高要県（広東省肇慶市）の尉に、張説をさらに遠方の欽州に流した。この事件の主役は、張兄弟に狙いをつけられた魏元忠から、一度は偽証を承諾しておきながら証言を翻した張説へと移ってしまったようにも見える。張兄弟にとっては、張説こそが裏切り者なのであった。

張説が欽州に到着したのは歳末で、その途中、船で外海に乗り出した。そのかみ孔子は、「道行はれざれば、桴に乗りて海に浮かばん」（論語）「公冶長」と述べたが、張説はそれに借りて、「入海」二首、其一の冒頭で、

桴入南海 桴に乗りて南海に入れば

海曠不可臨 海は曠しくして臨むべからず

と詠じている。彼はまさに「道の行はれざる」がゆえに、流謫の海にいたのである。彼に苦難の道行きを強いたものは何か。「入海」其二では次のようにうたわれる。

1 海上三神山 海上の三神山

逍遙集衆仙 逍遙して 衆仙 集まる

3 靈心豈不同 靈心 豈に同じからざらんや

変化無常全 変化して常全なし

東海の蓬萊・方丈・瀛洲の三神山には、多くの神仙がのびやかに住んでいた。神仙の心は常に不変なのだけけれど

も、神山をとりまく状況は変化して、恒常不変ではなかった。あるとき神山は龍伯の凌虐のために破壊される。

5 龍伯如人類 龍伯は人類の如くして

一釣兩鰲連 一釣に 兩鰲連なれり

7 金台此淪没 金台 此に淪没し

玉真時播遷 玉真 時に播遷す

『列子』『湯問』によると、渤海に岱輿・員嶠・方壺・瀛洲・蓬萊の五神山があり、一方、龍伯の国には巨人がいて、数歩足を踏み出すだけで神山に至り、神山を海中で支える鰲（おおがめ）を一釣りて六匹も釣り上げ、持ち帰って焼いて食べた。そのために岱輿・員嶠の二山は北極に流れて沈没し、離散した神仙は何億人にものぼったという。張説はこの神話を踏まえ、人間の姿をした龍伯の凌虐のために神山の黄金の宮殿が沈没し、玉真（神仙）たちが散り散りになったとうたう。永遠であるべき神山に暴虐を加え、神仙をさええ流浪させる龍伯とは、一体何の比喩なのか。

9 問子勞何事 子に問ふ 何事にか勞して

江上泣經年 江上に泣きて年を経たる

11 隰中生紅草 隰中に紅草生ず

所美非美然 美とする所は美に非ず

隰中に生じる紅草とは、低湿地にわがもの顔にはびこる龍草を指す。『詩経』『鄭風・山有扶蘇』には「山に喬松有り、隰に游龍有り」とあり、毛伝では「龍、紅草也」と注する。「毛詩小序」では「山有扶蘇、刺忽也。所美非美然」〔山有扶蘇〕は、忽を刺るなり。美とする所は美に非ず」と述べられるが、この詩は鄭の昭公（姫忽）が、上位の君子に恩沢を施さず下位にいる小人に厚く禄賜したという、臣下待遇の倒錯を風刺するものである。「小序」の「所美非美然」の句をそのまま自分の詩に取り込む張説には、張易之・昌宗兄弟を偏愛し外戚武氏の専横を許し、一方、魏元忠や自分のような氣骨ある新進官僚を排斥する武則天の人材登用に対して、憤りの心情があつたと見てよい。そうすると、平和な神山に侵入して狼藉を働く龍伯は、唐王朝ゆかりの人々を次々に誅殺し周王朝を開いた武則天に比定され、その龍伯のために住居を失い離散した玉真たちは、父祖の建てた国を奪われ息をひそめて生きる太子や相王など、唐王室に連なる人々に比定されるだろう。神山を海中で支える鰲をまるごと釣り上げてしまう龍伯は、あたかも唐王朝を根こそぎ奪取した武則天の姿そのものである。張説は明言しないけれども、彼はこのとき武則天政権の存在そのものが理不尽であると確信していたことになる。

ところで、自己の流謫の理由をどのように考えていたかを宋之問と比較してみると、張説の現実認識がきわめて明晰で特異であることが明らかになる。張兄弟に詔い仕えた宋之問は、神龍の政変で嶺南の瀧州（広東省羅定県の南）参軍に左遷されたが、その道中、彼はこの処分に至る理由を繰り返し述べる。例えば「早発大庾嶺」詩では、

自惟勗忠孝 自ら惟ふ 忠孝に勗めたりと

斯罪懼所得 斯の罪 得し所に懼し

皇明頗照洗 皇明 頗る照洗せられしに

廷議日紛惑 廷議 日に紛惑せり

という。彼が「自分では忠孝に努めたと思う。なぜこのような罪を得るのか分からない。帝がひたすら救済されようとしたのに、朝廷の議論が錯乱してどうにもならなかったのだ」と述べて、自己の嶺南左遷を「廷議」のせいにするのは身勝手な言い訳に過ぎまい。ただ、権貴に侍り賛歌を捧げることを誉れとする宮廷詩人宋之問にしてみれば、自分がこれまで国政の大事に参画したことはなく、まして神龍の政変に関与したのでもないのだから、嶺南にまで流される罪の重さを自覚できなかつたのかも知れない。それに対して、張説は明らかに武則天や張兄弟の意志に逆らつて嶺南配流の処分を下されている。それだけに、「美とす

る所は美に非ず」という断定は、正義は自分にあるという確かな信念にもとづくのであるが、一方、その信念が強固であればあるほど、武則天や張兄弟が支配する中朝への復帰の可能性は小さくなるだろう。では、武則天政権が遠からず崩壊して自分が都へ召還されるという予測が、この時点の張説にあつたのか。それも明確ではない。いずれにしても張説は恐怖に満ちた南海を渡る中で、ただ流謫の嘆きに沈吟してはいない。時政に対して所信を述べ、中朝への復帰の意志を明確にするのである。

二

「朱使欣に和す」二首は、広州から西江を遡る途上、同行の朱使欣の作に和したもの。其一は次のようにうたう。

南土多為寇 南土 寇を為すもの多く

西江尽畏途 西江は尽く畏途なり

山行阻篋竹 山行すれば篋竹に阻まれ

水宿礙萑浦 水宿すれば萑浦に礙げらる

使越才应有 越に使ひす 才 応に有るべし

征蛮力豈無 蛮を征す 力 豈に無からんや

空伝人贈劍 空しく伝ふ 人の劍を贈るを

不見虎銜珠 見ずや 虎の玉を銜むを

作者は寇盜が多く潜む西江の水陸の道を、深い竹藪や葦の茂る水辺に難渋しながら進む。しかし、彼は流謫の旅が難儀だからとて、悲嘆に暮れてばかりはいない。張説がいかなる官職を帯びて欽州に赴いたかは不明ながら、「南越に使い」して「蛮族を征討」するのは朝廷から付託された官吏の職務なのであり、彼はその才と力を持ち合わせていると自負するのである。第七句の「贈劍」(贈刀)は、それを佩びれば三公の位にも登れるという名刀が、三国魏の呂虔から王祥へそして王覽へと伝え贈られたという故事から、三公や宰相となる象徴の意味に用いられる。最終句の「銜珠」は、ふつう報恩の意に用いられ、鶴・蛇・魚が珠を銜んで謝恩に訪れるという用例は多見されるものの、虎の例は未見。この二句で張説は「三公の才ありとして人が劍を贈ってくれたのは、今のわたしには甲斐もない伝説に過ぎないけれども、虎が珠を口に銜んで帝への報恩の時を待っている、この姿を見てくれたまえ」と言う。この詩には、第五・六句に示された自己の才力への自負とともに、それを抛りどころにして中朝で活躍したいという意志が明瞭に表れている。彼は「盧巴駅にて張御史・張判官の到らんと欲するを聞くも、待つを得ず、留めて之に贈る」詩の最後でも、

皇恩若再造 皇恩 若し再び造らば
 為憶不然灰 為に憶へ 不然の灰を

と詠じ、「帝のご恩がもし再び行なわれるときには、この地で不燃の灰となっているわたしのことを思い起こしてほしい」と兩人に懇請して、死灰を再び燃え上がらせようとするみずからの気概を表明している。張御史・張判官はおそらくは南方を巡察する使者だったと思われる。この詩のほか張説には「嶺南にて使を送る」三首、「南中にて北使を送る」二首という、朝廷の使者を送別する詩が残っている。彼は南北を交往する使者に対して送別の詩宴を張り、異域における思いをさまざまに語りかけていたのである。

その中で、「南中にて北使を送る」其二は、時局に対する張説の所信の発露として注目される。これは五言二十二句から成る長詩で、後半は次の通りである。

- 13 聞有胡兵急 胡兵の急有りと聞き
- 深懷漢国羞 深く漢国の羞を懐く
- 15 和親先是詐 和親 先づ是れ詐なり
- 款塞果為讐 款塞 果たして讐の為なり
- 17 积弊応分爵 弊を積きて応に爵を分かつべし
- 蜀徒幾復侯 徒を蜀きて幾くは侯に復せんことを

19 廉頗誠未老 廉頗 誠に未だ老いず

孫叔且無謀 孫叔 且に謀無からんとす

21 若道馮唐事 若し馮唐の事を道はば

皇恩尚可收 皇恩 尚ほ収むべし

第十三句の「胡兵の急」とは、突厥の侵攻を指して言う。突厥は唐の建国当初から辺寇を繰り返していた。張説のこの詩は長安四年秋に欽州で作られているが、以下、兩唐書の「突厥伝」の記載により、武則天時代における突厥の默噶可汗の行動を示しておこう。

天授年間（六九〇—六九一）骨咄祿可汗こつとくろくの病没後、弟の默噶可汗が自立。

長寿二年（六九三）靈州を侵犯。にわか遣使来朝し、帰国公に封ぜられる。翌年にも遣使して和を請い、遷善可汗を加授された。

万歲通天元年（六九六）周に従つて契丹を破り、立功報国可汗に冊立される。

聖曆元年（六九八）武則天の養子となり、女を皇室に嫁がせたいと上奏。加えて、朔北六州に居住させられている突厥の旧降戸の返還、農器・種子の援助を要求。默噶の兵勢を恐れて結局は許可する。默噶の女を妃に迎えるために武承嗣の子の武延秀を遣わすが、默

噶は延秀が唐室の諸王ではないと怒り、延秀を囚えて反乱を起こし、静難・平狄・清夷等の軍を襲撃。

聖曆二年（六九九）拓西可汗と号し、各地に寇害。

久視元年（七〇〇）隴右の牧馬万余匹を奪う。

長安三年（七〇三）女を皇太子（中宗）の子に妻せたいと上奏。武則天は太子の諸子に盛服して使者を召見させ、默噶は馬千匹を献上して許婚を謝した。武則天は太子や相王（睿宗）および三品以上の朝集使に命じて、使者の移力貪汗を接待させた。

神龍元年の中宗の復辟後、默噶は再び靈州・原州・会州などを侵略し、隴右の牧馬を奪う。中宗は默噶との婚姻を絶ち、武力による対抗へと方針を変えるが、それは張説がこの詩を作った後のことである。

朝廷は默噶に対して懐柔と討伐とを繰り返したが、その及び腰の態度を默噶に見抜かれていたために、いたずらに翻弄されるだけであった。張説は和親と侵犯を繰り返す突厥について、第十五・十六句で「和親は侵犯に先だつ偽りで、塞門を款たいて降伏を申し出るのは結果として報復をねらいとするものなのだ」と断じている。「突厥伝」に録された默噶の行動を見るだけでもそれは当を得ている。

では、突厥に対処する方途はどうあるべきか。それが述

べられる第十七・十八句については、「繫」や「徒」という刑に服している人物が誰をイメージしているかは明確ではないけれども、両句が互文の構造を持ち、「繫」は牢獄に拘留する、「徒」は拘束して強制労働をさせる、「爵」は爵位、「侯」は高位高官の意味だから、結局、この両句は「徒繫（囚犯）を釈き放って官位を分け与えるべきだ」という意味に読める。朝廷の意に背いたかどで不当にも退けられた人材を、再び登用して国難の克服のために才能を発揮させよと主張していると思われるのである。もとよりその中には作者張説も含まれるであろう。

第十九・二十句の「廉頗・孫叔」は、作者自身の投影である。廉頗は戦国時代の趙の勇将。孫叔敖は春秋時代の楚の賢人で、荘王の令尹として法典を整備し、国政を安定させた。張説が自分をいまだ老いざる廉頗になぞらえるのは理解できるとしても、第二十句の「孫叔に謀がない」とは、どういう意味なのだろうか。

『左伝』「宣公十二年」に次のような話がある。楚軍が晋軍と対陣したおり、楚王の寵臣の伍参が開戦を主張したが、令尹の孫叔敖は、楚は近年いくさ続きだから万一敗北したら大変だと戦端を開くことに反対した。伍参は、「もし戦いに勝つたら、孫叔には戦略がないということになり

ますぞ（孫叔為無謀矣）」と減らず口をたたき、開戦に向けて突き進んだという。張説の詩句は伍参の軽薄の言をそのまま用いたものであるだけに、「孫叔無謀」とは、実は「孫叔有謀」と言うに等しい。張説は、『史記』「循吏」に立伝され、「三たび相を得て喜ばず、三たび相を去りて悔いず」と称えられる孫叔敖を、自己の人生の指標として設定しているのである。

最終二句は「もし馮唐のことを帝に奏上していただければ、帝は恩沢を賜わつて嘉納してくださるでしょう」と北使に要請して結ばれる。馮唐は漢の文帝の時代に車騎都尉となった人。匈奴の侵攻を憂える文帝が廉頗・李牧のような勇将を求めたとき、馮唐は、漢の法は重く賞の軽いことが将士の気力を萎えさせる原因だと述べ、雲中太守の魏尚が匈奴に対して功績を挙げているのに、ささいな罪によつて爵位を削られたことを指摘した。文帝はその意見を容れ、魏尚を雲中太守に復したと『漢書』「馮唐伝」にある。馮唐が文帝に求めた適正な人材登用こそ、張説がいま朝廷に要請する内容なのであり、それは第十七・十八句に詠じられた、囚犯を赦して適材適所に配置するべきだという主張とも重なるのである。

ところで、張説には対突厥従軍の経験がある。長安二年

(七〇二) 五月、并州道行軍大總管魏元忠の判官として、突厥・吐蕃を討つために太原の北方へ赴いたのである。魏元忠はかつて高宗の儀鳳年間(六七六―六七八)に、吐蕃の辺寇を憂え、長文の封事を上つて將軍の任命・用兵の要諦について意見を述べた。その中に、次の一節がある。

昔 漢の文帝は魏尚の賢を知りて之を囚し、李広の才を知りて用ゐず、乃ち其の生まれて時に逢はざるを歎く。夫れ広の才は天下無双なり。時に方に歳ごとに匈奴を事として、卒に任ぜず。故に近くに尚・広の賢を知らずして、遠くに廉頗・李牧を想ふ。馮唐是を以て其の有りて用ゐる能はざるを知るなり。〔新唐書〕「魏元忠伝」魏元忠はこの封事を高宗に上つて嘉納され、秘書正字に登用された。漢の文帝が匈奴の侵略に苦しみながら、身近にいる魏尚・李広の才を見抜くことができず、馮唐に諫められた故事を述べるこの段の内容は、張説が「南中送北使」其二で詠じたこととほぼ重なっている。張説が先年魏元忠とともに塞外に赴いたこと、その後魏元忠を張兄弟の構陷から救い、現在は嶺南流謫の境遇を共有しているという状況からすると、張説は魏元忠そして自分自身の中朝復帰への思いを、北使に対して表明していることになる。

彼の願いは、明けて神龍元年正月の武則天の退位と中宗

の復辟によって実現する。「赦されて帰らんとして道中に在りての作」では、国家が正常な形に復して自分が幸いにも帰朝できる欲びをうたい、詩の締めくくりで、

誰能定礼楽 誰か能く礼楽を定め

為国著功成 国の為に功の成るを著はさん

と言う。自分こそが国家のまつりごとに参加し、その成功を著録できるのだとは、彼の強い自負心と使命感の表れであり、これがこそ張説の本領なのである。

三

張説の嶺南詩で特に見落とせないのは、広く人に対して示される情愛である。それは、肉親への思慕や旧知に対する友情のみならず、現地の人との心の交流など、多様である。

まず、肉親への慕情を見よう。このテーマは、宮廷詩や集団的文芸の中で取り上げられることは皆無と言ってよく、旅の空で故郷や家人をしのぶ詩にはしばしば現れるものの、生命の危険をとまなう軍旅や、いつ赦免されるかわからない流謫の境遇では、特に重い主題となり得る。「嶺南にて使を送る」其二は次の通り。

万里投荒裔 万里 荒裔に投ぜられ

來時不見親 來たる時に親を見ず

一朝成白首 一朝にして白首と成る

看取報家人 看取して家人に報ぜよ

欽州への流謫が決まるや、張説は家人と別れを惜しむ暇も与えられずに出発を命じられた。帰京する使者に向かつて、彼は心労のあまり白髪頭となった今の姿を目に焼き付けて家人に知らせてほしいと願うのである。「南中にて蔣五岑の青州に向ふに別る」では次のようにうたわれる。

老親依北海 老親 北海に依り

賤子棄南荒 賤子 南荒に棄てらる

有淚皆成血 淚の 皆 血と成る有り

無声不断腸 声として腸を断たざるなし

此中逢故友 此の中に故友に逢ひ

彼地送還鄉 彼の地に郷に還るを送る

願作楓林葉 願はくは楓林の葉と作り

随君度洛陽 君に随ひて洛陽に度らん

前半四句は、老親と遠く隔たつて南の果てに棄てられた身の深い悲しみの表現である。加えて故友の蔣岑が故郷の青州（山東省臨淄県）に帰るものだから、彼の望郷の思いもいよいよ掻き立てられ、楓の葉になつて君に踵いて洛陽に帰りたいと結ぶ。楓は、五嶺の間に多生する木。このよ

うな抒情は、流謫詩なればこそ可能となる。

次に、高骘に対する三首を見よう。彼は司礼（太常寺）の丞であつたとき張兄弟に構陷され、魏元忠とともに謀反を圖つたと誣告されたが、張説の証言によつて救われ、嶺南（場所は不明）に流された。端州まで彼と張説は同じ道筋をたどり、時に旅程が重なり合つた。「端州にて高骘に別る」は、端州における張説の離別の作である。

異壤同羈竄 異壤 羈竄を同じし

途中喜共過 途中 共に過ぎしを喜ぶ

愁多時拳酒 愁ひ多くして時に酒を挙げ

勞罷或長歌 勞罷して或ひは長く歌へり

南海風潮壯 南海は 風潮壯んならん

西江瘴癘多 西江は 瘴癘多からん

於焉復分手 焉に於て復た手を分かつ

此別傷如何 此の別れ 傷みは如何

「異壤」は、異国。「羈竄」は、遠方の地への流謫。彼らは端州までの道中、しばしば杯を交わして愁いの心を酒に託し、ともに歌をうたつては疲れた身をいたわつた。彼らがこれから身を置く嶺南は、南海には風波が逆巻き、西江には瘴癘の気が濃厚に立ちこめる恐怖の地である。張説はここまで旅をともした高骘に感謝し、かつ、行く手に立

ちはだかる艱難を予測し、この別れの悲しみを、今生のいとま乞いにも似た思いで、高骾に語りかけるのである。

「南中にて高六骾に贈る」は、翌年の春に、欽州にいる張説から高骾に贈られた。高骾の排行は六である。

北極辞明代 北極 明代を辞し

南溟宅放臣 南溟に 放臣 宅る

丹誠由義尽 丹誠は義に由りて尽くせり

白髮帶愁新 白髮は愁ひを帯びて新たなり

鳥墜炎洲氣 鳥は墜つ 炎洲の氣

花飛洛水春 花は飛ぶ 洛水の春

平生歌舞席 平生の歌舞の席

誰憶不婦人 誰か憶はん 婦らざる人を

彼らは帝京の泰平の御世を去り、南海に身を置く放逐の臣である。張易之兄弟によつて仕組まれ、あわや皇太子や弟の相王までも危地に陥れるところだった魏元忠弾劾事件は、彼らなりの奮闘とその結果としての嶺南流謫によつて終止符を打った。第三・四句の「至誠の心は正義のために燃焼し尽くした。愁いを帯びた髪はますます白さを増してゆく」には、彼らが唐の宗室を守る正義の戦士だったという誇りと、その代償が嶺南流謫だったという嘆きとが屈折して込められている。

詩の後半では「嶺南は空飛ぶ鳥が墜ちるほどの熱さなのに、洛陽は今が花の舞い散る行楽の時、恒例の花見の宴席で、洛陽に帰れない人を誰が憶えていてくれるだろうか」とうたわれる。彼らの不在とはかかわりなく繰り広げられる洛陽の春の行楽は、思えば思うほど空しさがこみあげてくる。これも彼らにのみ共通する心情である。

「還りて端州駅に至る、前に高六と別れし処なり」は、神龍元年に赦免を得て帰京する途次、高骾とかつて別れた思い出の場所に立つて詠じた作品である。高骾は、すでに配所で没していた。

旧館分江口 旧館あり 分江の口

悽然望落暉 悽然として落暉を望む

相傳伝旅食 相逢ひては旅食を伝へ

臨別換征衣 別れに臨んで征衣を換へたり

昔記山川是 昔は記ゆ 山と川の是くのごときを

今傷人代非 今は傷む 人の代の非ざるを

往来皆此路 往来するは 皆 此の路なるに

生死不同帰 生けると死せると 同には帰らず

「旧館」は、かつての旅館。一年余り前、張説と高骾は、川筋が分かれるこの水辺の旅館で別れた。張説は今そこに来て、沈みゆく夕日を胸の張り裂ける思いで見つめる。眼

前にありありと蘇るのは、ともに過ごした旅の記憶。食事をともにした時には旅の料理を互いに回し合つて食べ、最後の別れに臨んでは旅の装束を形見がわりに交換した。嶺南への流謫という希有の体験が、尋常でない行動を取らせたのである。しかし、もはやその友はいない。「端州の山や川はあの日の記憶のままなのに、人の世はそうでないのが悲しい。行つて還るのは同じこの道なのに、自分は生き長らえ高戩は死んで、ともに帰京できない」と嘆く張説は、人の世の無常そして無情に、慟哭するのである。

高戩に対する張説の三首の作品は、抗争や流謫という官僚社会の宿命とも言える事象や、異域の苦難の中で支え合う強固な友情を描くだけでなく、同じ道を歩いていても生死が分かれる人間の運命の不条理性さえ暗示する。そのいずれもが、初唐詩においては普遍的な題材ではない。張説の特異な体験が、新しい抒情を開花させたのである。

張説はまた、朱使欣なる人物と嶺南で詩の唱酬をしている。さきに引いた「朱使欣に和す」其一は、ともに西江を廻る船旅の途上で、蛮地の民を安寧ならしめんとする自負と中朝への復帰の意志を、朱使欣に対して表明していた。其二は次のようにうたわれる。

江勢連山遠 江勢 山に連なりて遠し

天涯此夜愁 天涯 此の夜愁ふ

霜空極天靜 霜空は天を極めて靜かに

寒月帶江流 寒月は江を帯びて流る

思起南征棹 思ひは起こる 南征の棹さき

文高北望樓 文は高し 北望の樓

自憐如墜葉 自ら憐れむ 墜葉の

茫茫侶仙舟 茫茫として仙舟に侶ともなふが如きを

この詩に描かれるのは、奇峰がそり立ち江水が回つて流れる嶺南特有のカルストの絶景である。第三・四句は、空の限りに満ちわたる霜の気配と靜寂、豊かに流れる江水に光を映す冬の月の情景。第四句は、とりわけ杜甫「旅夜書懷」詩の「月湧大江流」を想起させる。第五・六句では、旅愁は南下する舟の棹とともにつのり、詩情は北方の都を望む宿樓の夜にいよいよ高揚すると言う。最終二句に表れている作者の「文思」(詩情)の行き着くところは、悲しくも「仙舟」の道連れとしてゆらゆらと流れる落ち葉の自覚である。後漢の李膺と郭林宗がともに乗った船は神仙の船と称せられ、このち「仙舟」は、知己の交遊、あるいは、名流の士のお伴をする意に用いられる。張説はこの詩で朱使欣を仙舟の主に、自分を落ち葉になぞらえ、兩者の隔絶した境遇を訴えるのである。朱使欣がいかなる人

物かは不明ながら、おそらくは張説の旧知で、朝廷の任務を帯びて南に下る旅にあつたと思われる。第六句の「文は高し北望の楼」という誇らしげな表現からすると、朱使欣は張説の詩の友でもあり、彼らは詩人として意気投合する關係にあつたと考えられよう。張説は流謫の道に朱使欣という詩友を得て、嶺南の絶景とその中を旅する旅愁をうたう。そこには詩人同士の深い敬愛の情があるのである。

さらに張説は、流謫地の欽州で、地元の人を含む多くの人々との心の交流を詩に描く。その一つ「江中に黄領子・劉隆に遇ふ」は次のようにうたわれる。

危石江中起 危石 江中に起こり

孤雲嶺上還 孤雲 嶺上に還る

相逢皆得意 相逢ひて 皆 意を得たり

何処是郷関 何の処か是れ郷関

奇峰が江水の中央にそそり立ち、その峰にちぎれ雲が帰つて行く。異郷に身を置く者にとっては、ひとときわ望郷の念がかきたてられる光景である。絵にも似た嶺南の絶景の中で親しい者たちが出会い、あたかも家族に逢つたような和やかな喜びに満たされる。「ここが故郷でなくていずこが故郷ぞ」という結句には、嶺南の山水と人情に包まれる心の安らぎがある。のちに岳州に再び左遷され、江南の山

水の中で新たな展開を見せる張説の文学は、すでにこの地において芽生えているのである。また、「南中にて王陵・成崇に別る」は、赦免を得て欽州を去るにあたって、世話になつた人々に感謝する留別詩である。

握手与君別 手を握りて君と別る

岐路贈一言 岐路 一言を贈らん

曹卿礼公子 曹卿は公子に礼し

楚媼饋王孫 楚媼は王孫に饋る

俛爾生六翻 俛爾として六翻を生じ

翻飛戾九門 翻飛して九門に戻る

常懷客鳥意 常に客鳥の意を懷き

会答主人恩 会す主人の恩に答へん

春秋時代、晋の公子重耳は曹の大夫の盪負羈に手厚い待遇を受け、漢の韓信は淮陰の漂母に食事を送られた。張説はこの故事を引いて、王陵や成崇に心からの謝辞を述べた。そして、にわかに翼が生えて都へ飛び還る自分は、旅の鳥を匿ってくれた主人の恩に必ず報いたいと結ぶ。彼は人間の情愛に強い信頼を寄せているのである。

おわりに

張説の欽州流謫詩群には、経世を旨とする官僚としての

自覺と、人の情愛に寄せる強い信頼が込められていた。張説が体験した初めての流謫は、のちに官僚と詩人との両側面にわたって大成する彼の方向を決定づけたと言つてよい。彼の中朝への復帰の熱意はきわめて強い。それは劣悪な風土への嫌悪から生じる逃避的な感情によるのではなく、人材登用や対突厥戰略を誤る現実の政治を批判的に見詰め、みずから政治に参画しようとする積極的意志による。流謫地の嶺南で彼は朝廷の使者のみならず現地の人々とも親しく交流したが、詩はそれらの人々と心と心の対話を行なう手段となつた。嶺南の絶景と人情の中から生み出された抒情詩は、それまで武則天朝の宮廷詩人に過ぎなかつた張説に新たな詩的可能性をもたらし、この十余年後、二度目の左遷を被つて岳州の山水に遊び、かの地で流謫小詩壇の主宰者となる張説の原体験ともなつたのである。(6)

注

(1) 拙稿「沈佺期の生涯と文学」(中国文化一九八六、大塚漢文学会、昭和六十一年六月)

拙稿「宋之問論(上)」(北海道教育大学紀要〔第一部A〕第三十七卷第一号、昭和六十一年十月)

拙稿「宋之問論(下)」(北海道教育大学紀要〔第一部A〕第

三十七卷第二号、昭和六十二年三月)

(2) 吉川幸次郎「張説の伝記と文学」(東方学第一輯、東方学会、昭和二十六年三月)にも、張説の欽州流謫詩に関する記述があり、それを参照した。

(3) 魏元忠弾劾事件と張説の関係については、拙稿「張説について(上)―その官人としての側面を中心に」(北海道教育大学紀要〔第一部A〕第四十八卷第一号、平成九年八月)に詳述してある。

(4) 朱使欣は「全唐詩」卷九十八に「道峽似巫山」という詩を一首残す。詩は次の通り。「江如暝天静、石似暮雲張、征帆一流覽、宛若巫山陽、楚客思帰路、秦人謫異郷、猿鳴孤月夜、再使淚霑裳。」この詩に対して張説は「和朱使欣道峽似巫山之作」を作っているが、四部叢刊「張説之文集」卷七に収める張説の和詩は、朱使欣のこの詩と同文である。おそらく、張説の作が朱使欣の作と誤伝されたのであろう。

(5) この詩は、「全唐詩」卷五五五に馬戴「江中遇客」と題して収められるものと同文であるが、「張説之文集」卷八にも収められているので、張説の作品と見ておく。馬戴は中唐の詩人である。

(6) 拙稿「張説と岳州小詩壇」(日本中国学会創立五十年記念論文集、汲古書院、平成十年十月)参照。

(北海道教育大学)